



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
10月号
通巻 662号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年10月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



「てまり」 故 溝口ツヤ子さん作品(文・4頁)

昭和54年11月14日の対談の再編集版(当時、法主満68歳、竹内氏満54歳)

頭幽一如の世界(2)

対談：法主 矢追日聖×竹内敏晴

霊動とは何か

竹内 さっきおっしゃった、何ですか、
霊動…?

法主 ああ、そうです、霊動。

竹内 霊動というのはどういうことですか。

法主 そうですね、どう説明したらええ
のか。これは人によって皆、違うんです
ね。

竹内 ああ、やはりそういうことですか。

法主 一般的には霊動を初めて起こした
場合、いわゆる発動するというのかね、
一番先に自分の体の状態を整えています。

大体、皆、一定してますね。腹の悪い人
であれば、揉んで運動させてみたり、頭
の疲れている人だったら何や自分の頭殴
りよるし、関節の悪い人は、自分で勝手
に捻^{ひね}って直したり、人によって出方が違
うんですね。

竹内 そういう状態が出てくるためには
何か精神統一みたいなことが必要なの
ですか。

法主 それは何でもない時に出てくる人
もあるし、私らと話しておれば出るよう
な人もあってみたり、あるいはまた布団
で寝とる間に片っぱの足だけ動き出して
ね(笑)。ま、そんな人もおるし。最初
は、体の調子を整えるところから出てき
ますね。

ここで一番極端な出方した例は、日本
生まれの韓国人の青年ですけれども、こ
れは腰が悪いんです。レントゲン撮って

みると歪んで、医者が手術せないかんと言うんですね。それで別に宗教関係も何もないですけども、私の所へ心やすいから遊びに来て、ここで話ししとつたら、バーツと立ち上がったって、腰を上げて弓なりになりよるんです。もう止めてくれって泣くんですよ、本人は。それは自分自身の持っている生命体の動きから出てくるんですけど、私の方であまり気の毒やったからピュッと波長を切ったら、もうスッと戻りましたがね。それで次に医者へ行ったら、ああ、これやったらもう手術する必要ないっていうわけや(笑)。それでまたしばらく無理したりしてまた悪うなつて医者へ行く。これはやっぱり手術せなあかん、て。あれ何回位かな、手術せえ、言われとつてん。

その青年が、最初出たのはね、他の人が皆、それぞれ靈動やつとたんですよ。それを指して、あんなもの皆、自己暗示やとか、催眠術にかかったんねとか、阿呆やとか言うて笑つとつたんです。笑っている内に自分もワァーッと出てきてね(笑)。助けてくれーと言いつた。そういう状態であつても、出る人は出るんですね。その人の体質にもよるんですかなあ。簡単に出る人もあれば、出たら結構だと思つて、精神統一を一生懸命にやつてる人がサッパリ出えへんというのもあるし(笑)。

古代人と禊みそぎ

竹内 それは神道にそういう流れとか考え方とか方法があるんですか。

法主 古代の人は全部が自然崇拜でしょ。天照大神やとか天児屋根命やとか、神社で祀っている固有靈を信仰するようになってきたのはずっと後のことやと思うんです。そんな信仰は大体、氏族が

ある程度権力を握ってきた社会から発生したと思うんです。例えば大和であれば、奈良朝頃、藤原氏が皇室と縁組なんかしているし、権勢の座にあったですわね。現在の春日大社、これが藤原氏の先祖さんとして祀られてるんですね。しかし古代は、全部共同体であつて、土地の所有権も無いんやからね。

狩猟するとか畑作りするとか、また魚とるとかして得たものは皆が共同で食べとつてん。だから、自然の神さんに対して皆が幸せになるためのお祈りをしたわけや。神さんと言えば大体、「自然神」のことを言つとつた。例えば上でゴロツと鳴つたら、神さんが上で鳴つてはんねから、カミナリやとかね。水には水の神さん、山には山の神さん、木には木の神さん、とにかく宇宙の生命体を指して言うてるんやけどね。そういうような信仰の状態の時には、一生懸命、神さん神さん言うてやつとつて、ある程度統一して来ると、まあ発動してくるんですね。

だからその当時は、神道に伝わったとかどう伝わったと言ふんでなしに、もうどこでもそういうような現象があつたと思うんです。言葉とすれば、禊と言ふんです。禊というのは、個人の修養の一つなんだけどもね。お祈りする場合に、まず自分の体を水で精進潔斎しょうじんけつさいしますが、そういう形だけやなしに、心の中のいろんな悩み事、そんなものが人間の心の垢ですから、先ずそれを取るということなんです。

ツミという言葉で言ってるんですけど、今の罪というのと全然イメージが違ってるんで、昔のツミというのはね、自分一人がツミ隠しておる状態を言いますね。包む、ということ。善悪の問題じゃなしに。そういうようなツミを、みな出してしまふ、つまりツミを削ぐ、「ツミソギ」と言

うんです。それがミソギの一つの語源なんですね。自分だけ思うて、人によ言わんことを外へ放す、つまり話すということなんですが、かっこ悪いし人に喋つたら困ると包み隠しているようなことを、自分の口から話してしまう、そんな人を禊の場と言ふんですよ。自分で言わんと思つてたかて勝手に言ってしまうんやから、しょうないですよ。「ツミ削ギ」やわな。

しかし、そうすると、自分はスカツとしてくる。悩みを全部吐き出してしまえば、あと心が何か軽くなつて、正常な気持になつてくる。それを「ミイズソギ」と言ふんです。

「ミイズ」というのは、神さんのお徳ということですよ。普通の手を洗つたりする水のことなんですけど。ミイズというように詛りがあるんですけど、古代から。自分のツミが出てしまふとスカツとして正常な気持が入つて来ますわね。それをミイズが注がれる、と。ツミソギとミイズソギと両方集まつて、ミソギという言葉ができてますねん。

だから別に神道とか宗教とかいうのは全然関係無いんで、各集落毎に全部やつとつたわけなんです。おそらく石器時代からやつとつたと思います。石器時代も神祭祀が中心の社会ですからね。例えば弓の上手な人がおれば、そんな場で、今度はあの山へ行くと鹿がおるとかこちらの山へ行くと鳥が多いとか、自分で口から出て来るんですね。そして鹿や鳥をとつてきたら、皆、寄つて食べるんやしね。

そういうようなのが、禊なんですね。

竹内 包んでいたものを削ぐということですか。今、伺つてたら、私が考えてることと非常に近い感じがするんです。まあ演劇ということになるかどうか分からんけれど。

心と体が動く

法主 今、あなた達の話の話を聞いたつたらよう通じらんですよ。襦をやると自分の今までのモヤモヤが全部サラッと出てきて、今度は正常な気が入ってくる、そうするとその後の表現が踊りになりますね。それは何も踊る形も歌も無いけれども、振りが勝手に出てくる、言葉でもって歌が出てくる。一番喜びの表現なんです。

「オ」というのは心のことで、心が満ち足りるということやね、オ（心）タル（足る）。心が満ち足りた状態で、もうとにかく手上げ足上げ、置く所を知らんというような状態が、踊りということになるんですけどね。だから踊るとかは、ものすごく起源は古いと思うんです。まあ今は、皆、振りとかストーリーがありますけど、その時代は、歌う人も自分で考えて歌うんじゃないに、勝手に口から出て来るんです。踊りでも勝手に出てくるんですね。

竹内 きれいになってから踊るんやなしに、吐き出す時に踊るってことは無いですか。

法主 その時は苦しんでますね。

竹内 苦しんでいるのが踊りになるということは無いわけですか。

法主 まあ苦しみの表現はありますけどね。

竹内 ちょっと変わった精神科のお医者さんがいて、前にその人と話しているうちに、一番古い精神修養というのは踊りじゃなかったかという話になって、もう少し考えてみようという話になったりになってるんですけども。

法主 古代人の踊りは、ほとんどが、笑いがついています。心をハラウ、アラウ。祓うて洗うて、笑うが出てくるわけです。今の神道の行事なんかは、

祓うことばかりやってますわ。それだけ残ったんですよ。祓うて洗うて、今度は笑うて、と順序はそうなってくるんだけどね。その時の体の表現は、心が満ち足りてるんやから、踊りということになるんやけどね。

だから笑うということは一番の健康法です。笑える心境というのが、一番健康な心の状態ですもんね。

竹内 思い出したんだけど。ヨーロッパの芝居が近代で行きつまってもうあかんということになるとるわけですね。それで中世の道化なんかを探って、その時に、自分の中で自分でもほとんど気づかずにここだけは人に見せたくない、と思ってるものが出てきた時に初めて、道化になれる、という考え方があります。自分で気がつかずに、出て来てしまつて、後でああ俺はこれを隠しとったんやというのが分かってくると、その時初めてその人が自分の表現を見つけられたんやという考え方があるんですね。

まあ私達のやっている面のレッスンというのは、そういうところへ行く、実は途中なんです。一応、そう考えてやっていくわけなんですけど。

法主 何とこの面白い話やなあ。

竹内 自分が動くこうと思って動くんじゃないで、どこから来るのか分からんけども動かされてるという経験をするのは今はなかなか難しいみたいですね。経験すると、皆、びっくりするけれども。

法主 ここでも、その人によって皆、種類は違いますが、経験してる人はたくさんおられます。まあ何ですね、これは経験した人でないと分からんかもしれないですね。

竹内 ここでこういう話をすると何の不思議もな話が出るけれど、他へ行つて喋ると、どっか気が違つてんのかしらと思われまうから（笑）。

不思議な体験

三好 ここで不思議なのは、自然に起こることです。

法主 勝手に出るんですよ、わたし等が出してるんじゃないに。

三好 僕は今、順序を踏んでかなりいろんなレッスンをやってみて、どういう人でもやっていたはずそういうふうになるなっていう感じはするんですね。だけどこの場合はそれが自然に起こるみたいで。

法主 と言うて、信じてたって疑うてたって無関係ですよ。出る人には。最近ね、ちょっと少ないみたいやけど。

杉本の仲間です。学生運動やとった人がいてね、話し合いをしている時、パツと発動したわけ、俄かに。大きい体でね。その時に言いよったのが面白い。「オレはマルキストやぞ」言うて。そしてバタバタバタと（笑）。あの時ズボン破りよったなあ、あんまりえらい抵抗して。

杉本 必死に叫んどったけど。

法主 はたで見えて皆、笑つとんねんもんな。別に宗教的な行事とか行をする場でも何でも無いんですよ。現代的な考え方をすると、わし等みたいな骨董もんと、ここで話し合いしてる場で、ですもんね。

竹内 九州の大部分の方で逢いたいと言う坊さんがいて、呼ばれて今年初めて行きましてね。念仏があるんです。大勢で念仏していると、今みたいなのが起こるわけですけど。そういう念仏が、昔あったということは僕は予測持っていたし、一遍上人なんていうのもそうやろと思つてただけですけど、それが今、あるとは知らなかった。それで

蔭を受けたと言って、それから後、天地がひっくり返るというてましたけどね(笑)。

法主 今のいろんな宗教団体なんかでもようありますよ。滝に打たれたりとかの行をするのもあるし、大声でお題目唱えて太鼓叩いて、動から入っていくようなものもあるし、いろいろあるようすがね。自分からなろうと思うて、信者が寄ってたかって一生懸命にやってるんで、ある程度の雰囲気ができたらね、出てくるんです。まあこの場合は何か知らんけど訳の分からん、突発的に出るようやけどな。

竹内 そういうところでは、お念仏でなければ起これんとか、まあとてつもないことだと思ってるわけです。しかし、そうやないんやないか、人間なら誰でも起こり得ることだというふうに思えるのですが。

法主 そうです、誰でも起こりますよ。

竹内 その事だけにこだわって、えらい大変な事やと言ふような事じゃない気がする。科学的とか何とかいうことを別に排除するものじゃなくて、ちゃんとあるやろうと思うんですけれど。よく分からんのですがね。

さっきのお話で、固有霊の憑依現象が、自分の潜在意識から来るものがあるとかというのがありましたけど……。

法主 憑依霊の現象なんて言うて、ちょっと法外な話やから理解しにくい人が多いと思いますけど、事実やつぱりありますねん。動物霊がひっかかってくるのもあるし。一番たくさん集まってやっついたのは、昭和17、8年頃やつたか、私、身延へ行きましてね、あそこの思親しんかく閣いがある山の上へ行ったら、精神障害者がたくさん入ってるようなお籠りさんが15、6人居ったんですね。で、坊さんが前で導師しとるんです。神道で言

えば、サニワというやつやね。私はひやかしに行つとるんやから、一番後ろで見とったんです。それで、皆、何かいろいろその人と話しとるんできところ、皆、さっぱりおさまりやらへん。坊さん難儀しとんねん。これも滝にうたれてかなり修行してきた人やろと思うんやけどね。ちょうど1時間位見とったかね。したらその中の1人2人が、パツと後ろを向いて寄って来るんですよ。資格持って来てる坊さんに気の毒やし、私はもう逃げたんですがね。

私がじーっと見とつたらほんとどが、動物霊でした。その坊さんは、手をどういふ恰好にしたから人間霊やとか、こういう出方をしたから狸霊やとか、形だけでやつとるんですよ。私の場合は、その実体を波長で捕えますから、こっちから見ると騙しとるのがよう分かるんですよ。中には不動さんの恰好したり仏さんの恰好してみたりするのもあったけど、割合に狸みたいな霊が多かったです。その行者さん、よう見抜かなかったですものね。ああ、こんな所に居たら、3日も4日も引っぱられる思て、サツサツと逃げて帰ったんです(笑)。

普通の祈祷道場へ行つたかて、そんな人等がよういます。たいてい肉体の神経系統に故障起こしてます。それさえちょっと外しといてやつて、あと養生さえすれば、あんなんじきに治るんやけどね。

本心の教え

法主 そういうようなんと、霊動というのとは全然違います。大体、霊動は、他から来たもんやしに、自己意識から出てますね。それで、まず自分の健康の方から始まるんですね。体の調整をしていきます。例えば、これ食べた胃に悪いとい

うことを自分で知ってますから、欲しいと思つて、手を持って行つたかて手がパツと止まってみたり。ごはん一杯なら一杯でいいと、二杯喰おうと思てたかてパツと箸が止まってしもたりね。人によってその出方が随分違います。

だからまた、中にはええかつこしいという人がありますわね。そんな人が霊動したら、人前で一番不細工なことやりますね(笑)。皆に寄ってたかって笑われるような事やります。自分の気持では絶対いやや、もうかなわんなと思ってるんですよ。それに皆が笑うような動作が勝手に出て来るんですよ。それ霊動というのはええ修養になりますね、個人の修養には。

そんなんおつたのう。

杉本 ものすごう二枚目で女の子によもてるようなのが、霊動を起こすと何とも言えんひきつったような恰好して走り回ってました(笑)。

法主 人前でそれをやれば、ええかつこしいといふのは段々自分から無くなつていきますしね。三好 野口整体に、活元というのがあるんですよ。霊動の中でその健康の調整ということだけに注目したようなものです。

竹内 それは、きつかけを作る方法があるわけですが。

法主 杉本でも、腸が勝手に動きよんね、とか自分で言うて見せとつたですよ。

杉本 この頃は調子悪かったら自分の意識で直せるけどね。始めの頃は、おなかグワァーと動くねんものなあ。自分で気持悪かったですわね。自分の腹を自分で動かすなんて考えもせんかった。けども学生時代に、酒飲みすぎてたからね。

法主 みな自分の本心が自分に教えてるねん。別に他から何んにもしに来てへんねん。自分が自分でやっつてることになんねんけどな。

竹内 かゆい、というのはどういうことか誰か教えてくれないかと思ったけど、医者にも何の研究も無いんですね、どうも。

2年位前に、非常に苦しんだことがあって、体がほとんど動かなくなつて寝たきりになってしまったことがあるんですよ。その時にいろんな手当てをして直りかけの時に、どうもかゆい所がいろいろ移っていくわけですね。そこから言うと、その所の血行を良くせよ、ということやと思うけど、医者にも聞いても分からないんですね。

法主 そんな医学で説明できへんのやろか。

竹内 ツボというのがありますね。で、ここがかゆい、ここが直つて来ると、こつちがかゆくなる、それが一つ一つ全部、ツボというのに合ってくるわけです。昔の人は、ツボをそうやって見つけたのかなあ、とも思ったんです。かゆい所に手が行くのは、意識で分かっているから行くばかりじゃなくて、寝てる時でもボリボリかいてるんじゃないかと思うんです。体全体が一つのものだという考え方の一番分かりやすい例になるんじゃないかと思っただけです。

法主 そんな事、考えたこと無いけどね。いろんな事を経験してはるんやなあ。

竹内 何ヶ月か、体が全く動かなかった。

三好 縮んだみたいになんて感じて、竹内さんもう死ぬんじゃないかという感じで。

竹内 精神上の事で非常に苦しんだ事があった、それがあつたからあんなにひどくなつたんだらう

法主・言の葉



神ながらの信仰とは自己の本霊のうごきのままに自分を任せることである。本霊は絶対である。

という事だけは分かったけれど。

しかし、こんな話ができるような所における人は幸せだなあ。僕はこの頃、言語治療とかそういう事をやっていた現場によく立ち合わされるんですけど、それを治療してる人の方がもうメチャメチャやという感じが強くて、ケンカする事ばかり多くて、今みたいな話をする事はめつたに無い。少し知りたくてもなかなか分からないし。

表紙写真について

母とてまり

奈良市 溝口 真弓

母は昭和60年和歌県御坊市で初めて「てまり」に出会いました。

球体の中に三角形・四角形・五角形・六角形を組み合わせ、様々な模様を作り出すという繊細な技術に強く惹きつけられ習い始めたと言っています。

その後「日本てまりの会」に入会し、切磋琢磨しながら作品作りに取り組んでいました。元々母は凝り性なところがあつた、ほぼ出来上がった大きな作品を見ては配色が気に入らないと何十時間もかけて作成していたものをほどこいてしまうということもしばしば。てまりの色遣いはある程度予測できても完成してみないとわからない部分が多く、それがとても難しいと言っていました。その頃には作品作りが楽しいというより、てまりに魅せられ完全にのめりこんでいたと思います。

奈良に越してからは「あじさいの箱」のボラティアグループの一員として「てまり教室」を大倭会館で毎月開いたり、平成19年から平成27年にかけて岡山県真庭市美甘にて「てまり教室」

霊動しているところを拝見したい。動くかもしれないねえ(笑)。

三好 僕が初めて来た時に、裸会に出たんです。その時に、ああ、これだったらすぐ体が動くなあと思っただけですよ。何言っても良いしね。何しても良いと。自分をすごく自由にね。全然、竹内で経験してなくて来たら、よくは分からないだろうという気はするけど。(続く)

と「てまり展」を毎年開催するなど活動を広げました。

奈良・岡山での作品展には毎回沢山の方にお越しいただき母はとても喜んでいました。奈良の作品展では他の教室の先生・生徒さんの作品も飾られており、自身の作品作りにも参考になるといつも熱心に鑑賞していた姿を今でもよく覚えています。

母がてまりに出会って38年。72歳で病に倒れ帰幽する数週間前まで作品作りに取り組み、遺した数百個という作品の中から私と父が選んだてまりを今回写真に収めました。毎月欠かさず読んでいた機関紙『おおやまと』に掲載していただけに母も大変感激していることと思います。

母に関わっていただいたすべての方に心より感謝申し上げます。



岡山県真庭市美甘での「てまり展」で。前列真中が溝口ツヤ子さん。

あじさいの花々

——紫陽花邑の活動紹介(第1回)

須加宮寮書道クラブ

「あじさいの花々」という新しい企画を始めることになりました。邑の中のさまざまな活動や仕事、人物に焦点を当てて、「こんな動きやあんな動きもあったのか」と新鮮な発見が感じられる取材をしていきたいと思います。

第1回目は救護施設須加宮寮の書道クラブを訪ねることにしました。頂いたパンフレットによると、須加宮寮とは「当法人(※社会福祉法人大倭安宿苑)で最初に設立された施設です。救護施設というのは、生活保護法の枠内で、障害種別を問わず、ご利用者を地域の住民として尊重し、意向にそった自立支援を行い、その人らしい豊かな生活の実現に最大限努めることを基本理念としています」とあります。



平成29年に2回目の建て替え工事が完成した、紫陽花邑の東端に位置するまだ真新しく感じられる施設です。正面玄関から入ってすぐのところに広々とした「日常活動室」があり、そこで毎月一回のペースで書道クラブを、外部から先生を招いて実施しているとのことでした。

書道に集中

去る9月16日に取材に伺った際に、まず矢追明孝施設長が迎えてくださり、生活指導員の葉山実樹さんが活動内容について細かく説明してくれました。



当日は13人の利用の方が参加していて、何人かの方は11月末から始まる奈良県心身障害者作品展に出品するための作品づくりに熱心に取り組んでいました。この作品展に出品できるのは身体的、知的、精神的に何らかの障がいがあると認定された人だけとのことですが、その他の方々も同じように一生懸命に集中している姿に感心させられました。

先生の大倉眞知子さんが準備したお手本を使っ、それぞれ季節を感じさせる「秋風」「柿」「いねかり」「芸術」「実りの秋」などの字をしっかりと見ながら筆を握って書いています。「思いやり」や「一心不乱」というお手本もあります。なかには、「行く秋をしぐれかけたり法隆寺」とか「今京都の秋を楽しんでいます。お寺をゆっくりとめぐりながら……」などの難しい課題に取り組んでいる方もいました。

先生は皆の中を歩きまわって、一人一人に「いいですね」とか「ここはもう少し力を入れて」とか丁寧な声をかけながら指導していき、参加者は

うなずきながら作品を仕上げていきます。先生のお話では部屋に持って帰って練習を続ける努力家もいるとのことでした。

生活の中の潤い

須加宮寮の書道クラブの歴史は古く、過去には且田容子さんをはじめ何人かの先輩の先生が指導してくれていたそうですが、大倉先生が始められたのは一年あまり前のことだそうです。大倉さんに感想を聞くと、「皆さんがとても熱心で生き生きと楽しんでくださっているのが感じられてやわやわがあります」と前向きな答えが返ってきました。「ここまで教えていいのか、まだまだ暗中模索ですが、ゆっくり考えていきたいです。たとえば、半紙に字を書くだけでなく、実現できるかどうか分かりませんがウチワなどの素材に書くようなことがあっても楽しいかもしれませんね」とアイデアを話してくれました。

須加宮寮では書道クラブだけでなく、外部からの講師を迎えての音楽療法とか、ひな祭りや七夕祭りなどの季節の行事や、卓球大会、希望食事会、カラオケなど生活に潤いをもたらすさまざまな活動が実施されているとのこと、また別の機会にぜひ紹介させて頂こうと考えながらこの日の取材を終えました。次回はあなたのところかも？

(文・岸田哲／写真・中村千久佐)



令和7年6月28日(土) 30日

こもれる魂魄の地を訪ねて(第56回 ②)

鹿児島から高千穂まで

大倉有宏

7日間で、鹿児島↓西都原↓高千穂↓阿蘇↓吉野ヶ里↓太宰府↓宇佐を巡ろうというのが今回の予定。霧島での挨拶を終えて、まず向かうは鹿児島県。幼少期に城マニアとなつて以来、全国の多くの城郭を巡ってきたが、残すところ踏んだこともないのが鹿児島県であった。

鹿児島県といえば私にとっては鹿児島城、豊臣秀頼の脱出伝説、島津家、そして西南戦争。秀頼が脱出したとは思っていないが、それでも鹿児島に伝説が残っていることは、島津家や鹿児島の人達からの慕う心があったということだと思う。そういう心を訪ねてみたいという気持ちがずっとあった。

まずは鹿児島城へ。その地へ訪れた際は、その地の主要な歴史博物館をまずは訪れるというのが習慣。ちょうど鹿児島城の上に、黎明館という名前ですれが建っていたので訪問。戦国時代の全員の罪障祓いの道、未来建設への共なる歩み、それはまた明治維新・第二次世界大戦とも連動

神武天皇登陸跡と八紘一字の碑



神武天皇登陸跡と八紘一字の碑

して同じ願い、またかえって古代の隼人などに遡って、それらを共に祈念する思いで巡ってきた。

夕方になり、新婚旅行らしく海沿いを散歩する。ところが結局は、なぜかまた城山に戻って、「西郷隆盛終焉の地」の碑前に至った。翌日の訪問予定が前倒し。階段をのぼる前にすでに、西郷公の「私には苦しみはない(仲間の方を頼む?)」といったような雰囲気を感じる。そういうもののかなあという加減に思いながら、碑前にて祭祀。また前のめりになり始める。碑前には無残にも大量の一元玉が散乱していた。お掃除してさしあげたいが、どうせまた大量にばら撒かれる未来が見えたのでやめておいた。未来建設を共に願ったあと、土を代わりに置いておいた。その後は展望台へ行き、またもとの新婚旅行へと戻った。

翌朝は西南戦争の本営跡へ。お供え、祭祀、祈念。最中、喜ばれている心地であったが、見えぬ後ろで、慣れない妻の気が散っているのが気になるという何かを感じていたところ、終えて振り返ると途端に妻が滑り転げた。何も言っていないのに妻が「気が散ってたから教えられたのかも」と一言。そういうお勉強もあるのだろうか。

お昼になり、鹿児島城、島津公、西南戦争、当地の人々によくご挨拶を済ませ、次は杉本さんに薦められた西都原古墳群へ。行く前からあまり自分とは縁がなく初めてのご挨拶かなと思いつながら伺った。壮大な空間に、大量の古墳。ご挨拶に来ましたという気持ちで、まずは中心部でご挨拶。奥のある古墳からこつちに来てほしいというような心地になったのでこちらへ行くと、中に入ることでできるようなっていったので中へ。女性がいるような心地があった。そんなことをいくらか繰

り返して、最後は博物館へ。上に一望できる展望台があったので、そこで聖歌を一節歌って遊んでいた。

次は人生初の高千穂。幣立神宮は翌日に行くとして、まずは一般的な高千穂の町へ向かった。近づいてくると、ものすごく神聖な、古代ながらの空気が残っているような山々に突入した。そして、トンネルを越えて高千穂の町に入った頃、日が照りながら、パラパラと雨が降ってきた。清らかな雨、お出迎えなのだろうか、見ているだけで嬉しい心地がした。ホテルに到着して車を降りたら雨が止み、雷がただ一度鳴り響いた。この旅の中で雨はこの一度だけであった。

夜は高千穂神社で年中披露されているという高千穂神楽へ。天の岩戸開きに関連する一連の神楽。裸と霊動の話をしているんだと、自分も今我が身をもって経験しているものがあるので、自ずから重なる勝負に思われた。こうした形が残っていることにも喜びはあるが、この神楽の意味が何であるかということがしつかり伝わり直す世の到来を願う心になった。他人事ではない、加美のまにまに、知れる人が知らせ、知らされた人が知っていかなくてはいつも思う。二日目を終えた。

翌朝は、まずは高千穂峡でボート。残念スポットという声もあるがそんなことはない。初めてのボートが楽しかった。

楽しんだ後は、ようやく幣立神宮へ。相変わらず鬱蒼とした山中という感じ。本殿前に来たが何も感じない。境内を限なく歩いたが何も感じはしなかった。そのあと少し離れたところに「神武天皇登陸跡」という所があったので行くと、阿蘇山が広がって見える開けた場所があった。高千穂の皆さんの生きていた景色を少し見た気がした。

あじさい日誌

9月7日 大倭墓地の大掃除が行われました。

9月12日 大倭会館で毎月活動されておられるメンバーの有志の皆さんが大倭会館の大掃除をして下さいました。

瑞光院の裏側に仕掛けてあった捕獲器に大きなアライグマが一匹つかまっていました。ここ数日の猛暑の中、水の無い状態で力尽きたようで、すでに命がない状態で見つかりました。

9月14日 午後2時から大倭拝殿にて大倭会主催の祓会が行われました。この日は姫路市の山下宜子さんが参加されました。今回は私の二十歳(数人を除く)がテーマで始まりました。

9月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。午後1時から交流の家でNPO法人むすびの家の理事会、午後3時から同じくNPO法人むすびの家の総会とFIWC定例委員会が行われました。

9月23日 午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が行われました。この日は昭和37年9月23日の法話をお聴きしました。

9月29日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で行われました。

9月30日 大倭会会員・竹内靖(大倭会、会計監査)さんがこの日をもって大倭殖産(株)を退職されました。大倭会会員は変わられません。大倭殖産(株)で、長い間お仕事ご苦労様でした。

10月3日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で行われました。

大倭会文化講演会

日時 令和7年11月9日(日)
午後1時～3時30分(開場12時30分)

場所 大倭拝殿 入場無料
講師 盛口 満 氏

(沖縄大学文学部こども文化学科教授)

「沖縄から自然と人間のあり方を考える」
～ 学校という場で僕が教わったこと。
ものとひとの歴史～

自然の力と私たち人間のあり方を一緒に考えたいと思います。特に近年の酷暑と局地的な大雨など地球の環境で、人にとって自然との関係は、かつてどうであって、今、どうなのかなど興味深いお話をさせていただきます。



プロフィール:1962年千葉県生まれ。

千葉大学理学部生物学科卒。自由の森学園高校の理科教師として15年勤務。2000年に沖縄に移住。教員のかたわら、自然に関する一般向けの本を書いている。現在、沖縄大学文学部こども文化学科教授。主な著書に『めんそーれ化学』(岩波ジュニア新書)、『沖縄の生き物』(中公新書) など多数。



拝殿前の彼岸花

10月4日 午後6時から大倭町自治会の役員会が大倭会館で行われました。

10月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半から大倭会館で倭の会が行われました。

大倭安宿苑では

9月9日 午後2時から特定社会保険労務士を講師にお招きしてハラスメント防止研修会を実施しました。対象者は各施設の主任級クラス職員で14名が受講しました。

(菅原園)

9月13日 高校生のボランティアが来園し、2階交流ホールにてエレクトーンの生演奏を行ってもらいました。演奏中に横に行ってリクエストしたり、冗談を言ったりと楽しい時間を過ごしました。その後カラオケも楽しめました。

10月2日 1階交流ホールにて割りばしで作った鉄砲を使い、職員が付き添いのもと、射的を行いました。狙った物に当たるととても嬉しそうにされています。的を外した利用者の中には悔しくて舌打ちする方もおら

れるくらいに真剣に参加されていました。また、お菓子取りゲームをして、取ったお菓子を嬉しそうに食べておられました。

(須加宮寮)

9月12日 敬老のお祝いとして70歳以上の住居者の方のお祝いをしました。メッセージカードをお渡しして、喜んで頂きました。

9月16日 書道クラブがありました。奈良県障害者作品展に出す作品を書く方や、作品展に出さない方も多数参加されました。書き終わって先生にみてもらい指導をして頂きました。

(長曾根寮)

9月15日(デイ) 敬老会で職員全員が手品などを披露し、手作りの鶴亀の記念品をお渡ししました。

9月21日(特養) 十五夜にちなんだ飾りつけをフロアに行い、十五夜にまつわる音楽を流しながらレクリエーションを行いました。

9月18日 防災避難訓練がありました。参加された皆様は無事に避難する事が出来ました。また、消火訓練の際、介護体験で来ていた大学生にも参加してもらいました。

(八重垣園)

9月15日 敬老の日に松花堂弁当でお祝いをしました。今年は2名の方が100歳を迎えられ

ます。

ミニニュース

「交流の家」1階にエアコン 交流の家は寒暖をしのぐために、長年ストーブ、コタツや扇風機で対応してきましたが、この度FIWC関西委員会の先輩キャンパーの厚意により1階ホールにエアコンが設置されました。「季節を問わず活動がしやすいります」とのことです。

編集後記

今号から「あじさいの花々——紫陽花邑の活動紹介」という企画を始めます。ここをぜひ取材してほしいというようなご希望があれば、遠慮なくご紹介ください。(K)

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
11月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会文化講演会
11月9日(日) 午後1時より大倭拝殿にて。詳しくは上の案内をご覧ください。

* 月次祭(大倭神宮)
11月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮)
11月23日(祝・日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。